

学生図書委員だより

発行 二〇一〇年四月
編集 学生図書委員

No.14

あなたはどうかやって自分の読む本を決めていますか？ 一度好きになった作家の本を読みつくすという人もいれば、タイトルや装丁でなんとなく、という人もいるでしょう。では、こつこつというのは？ 本に出てる本を読む、通称「追いかけて読書」。これをやったことのある人は、相当な読書好きのはず！ 今回は、そんな「追いかけて読書」をするのにびつたりな(?)本をテーマにした本を紹介します。

本そのものを題材にした作品は結構あるんですが、一番のおすすめは何と言っても『三月は深き紅の淵を』(恩田陸)。たった一人にだけ、たった一晚貸すことが許された本をめぐる珠玉のミステリーです。自分の読書体験をつづったエッセイだと、『本を読むわたし』(華恵)もいいですね。執筆当時の作者が十五歳

本による

特集

本のための

本の本

で、その瑞々しさももちろんいいのですが、しっかりと地に足のついた端正な文章が素晴らしい。

本のある場所を舞台にした本だと、東京の下町の古本屋を舞台にした『東京バンドワゴン』(小路 幸也)や、主人公が突然天国の本屋さんでアルバイトをすることになるという不思議なファンタジー『天国の本屋』(松久淳+田中渉)、さらには図書館を舞台にした『れんげ畑の真ん中で』(森谷明子) などなど。直木賞作家の角田光代が古本の師匠に従い古本屋を訪ね歩く『古本道場』(角田光代、岡崎武志)も面白い。角田さんはその名もずばり、『この本が、世界に存在することに』という本も書いています。

寝る間も惜しんで本を読む。そういう経験、一度でもしたことありますか？ いや別に、読書でなくても構いません。なんでもいいんです、寝食を忘れて何かに夢中になった思い出があるって、それだけで幸せなことなんですよね。

文豪とお近づき

芥川龍之介

芥川は読みやすそうで読みにくく、文章がきれいなようでひねりがあるような、なんだか初心者に優しいのかそうでないのかよくわからない作家です。しかしこれは読むごとに作品から受けるイメージが変わるためかもしれません。

芥川はたくさん出版社から本が出ていますが、やっぱりスタンダードなのは新潮文庫でしょう。一番初めに読むなら、『蜘蛛の糸 杜子春』がおすすめ。都会的なニヒリストの秀才というイメージが強い芥川の、人や物事に対する優しいまなざしがうかがえる作品集です。この一冊をじっくり読めば、芥川って実は優しい人だったのかも、なんて思っちゃうかも。



Fly
so
far

今月の二首

白い手紙がとどいて明日は春となる

つすいがらすも磨いて待たう

斎藤史

春の陽気が差し込んで、薄いガラスがほんのりぬくもる。私のもとに、あなたからの手紙が届く。

過ぎゆきてふたたびかえらざるものを

なのはなばたけ なのはな はな

村木道彦

通り過ぎていったあの黄色い花びらの海は、来年も僕を待ってくれるだろうか。